源氏物語空蟬と狭衣物語との交渉

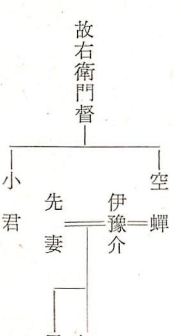
――空蟬の構想圏から源氏宮・女二宮の場面へ――

土岐武治

一

源氏物語に見える空蟬の横想は、著作上狭衣物語における女二宮の場面に種々交渉を持ち、また部分ではあるが、空蟬の事件は同じく狭衣に見える源氏宮の趣向にも直接の影響を与えてゐるやうである。小稿はそれらに関する論証であるが、いま行文の都合上、これら両者の関係を論述する以前に、まづこれら二作品の典拠関係を考証立てるための必要な範囲内で、右に言ふ空蟬・源氏宮・女二宮それぞれの生活境遇について調査検討してみることにする。

最初に空蟬についてであるが、この女の系図は次の通りになつてゐる。



空蟬が源氏物語に初めて登場するのは、帚木巻後半からである。すなはち光源氏が内裏からの帰途の方違へに、紀守の中川の宿に往くことになる。そこで源氏は紀守から継母、つまり父伊豫介の後妻である空蟬の噂さを聞くことになる。その晩、源氏は独寝のさびしさから例のすき心が起き、兼々理想の高い女性と聞いてもゐた空蟬の部屋に、奥の声音を頼りに忍び込んだ。夫のある空蟬には道ならぬ事と切なく、心から悲しく思つて泣き入る中に、源氏はその素気ない態度を改めなかつたといふ、この事件が源氏と空蟬との第一回の語らひとなつてゐる。また同じく此の帚木巻で、光源氏は再び中川の宿を訪ひ、その宵に小君の案内で空蟬の部屋に忍び込むが、空蟬は前回同様に身分違ひの間柄であると押し通して、何処までも冷い返答をするのである。これが源氏と空蟬との第二回目の語らひとなつてゐる。やがて空蟬巻になると源氏は空蟬の態度に失望すればする程に、その思ひが止め難く、遂に三度目の中川を訪れるといふことになる。ここで源氏は小君の導きで空蟬の寝所に忍ぶのであるが、それと気付いた空蟬は小袿を脱いで、その場を遁れることが出来た。

だが、このやうなことによつて、夫のある空蟬にとつては、いよ〳〵苦悶の種になつてゆく。かくて関屋巻に至つて、空蟬の夫常陸介は、老衰の果てに此の世を去るのであるが、未だ若い空蟬には、河内守の下心も見え透いてゐるので、これを機に出家して尼となつてしまふといふ筋書きが、源氏物語に見える空蟬の生涯となつてゐる。

次は狭衣物語の源氏宮について記すことにするが、この方は先帝と中納言御息所との間の女である。物語主人公の狭衣中将は先帝の妹君である前斎宮と堀川大臣との間の嫡男であるので、狭衣の母は源氏君の叔母君に当ることになる。この源氏宮の性格や境遇に関する典拠については、既に季刊誌国語教育第六号所載拙稿「源氏桐壺巻と狭衣巻一との交渉」中に詳述する通り、それは桐壺巻に見える先帝の御子藤壺を模して著作されたものである。ところで幼くして狭衣の邸に引き取られた源氏宮と狭衣との血縁は従兄妹となるが、世間一般では実の兄妹の如く解してゐる。この両人が長ずるに及んで、狭衣は源氏宮に対して意外にも想ひを懸けるやうになつてしまふが、源氏宮は狭衣の言ひ寄るのを次第に敬遠するやうになつて来る。しかし狭衣には、相手がそのような素振りを見せられれば見せられる程、源氏宮に自分の意中を理解させようとのみ、その機会を睨ふことになる。狭衣巻一之下の発端で狭衣中将が源氏宮の所に出向かれると、そこには源氏宮と母君とは碁を打つてゐられたが、狭衣はその源氏宮の容姿を眺めては一層心を傷めるのである。実はこの趣向は後段に詳述する通り、源氏物語空蟬の冒頭で空蟬と軒端荻との囲碁の筆法に依拠することになろう。

最後に女二宮の素姓について略述することにする。この女二宮は嵯峨院の第二皇女であつて、この姫君が物語に登場する最後の機縁は、巻一之上に見える出来ごとによるものである。すなはち五月雨の夜に帝は内裏に狭衣を招いて管絃の遊びを催したところ、狭衣の横笛は空に冴え渡つて、遂に例の天稚彦の来迎の場面となる。この時狭衣の昇夫を止められた天皇は、その代りとして女二宮を狭衣に賜ふ約束をなきる。これが契機で狭衣物語巻二之上に、宮中では女二宮の降嫁の準備となる。ところで、その最中に狭衣は或る夜宮中に中納言の内侍を訪ね、その時、奥に聞える琴の音に引かれた狭衣は、女二宮の部屋に忍んで思はず女二宮と契り合つてしまふといふ一場面がある。やがて女二宮は懐胎の身となる。それに気付いた母大君は心配の果てに女二宮を宮廷外に移し、乳母等を通じて自分が懐姙の如く世に言ひ振らさせる。やがて女二宮は男子を生むことになるが、漸く母宮はその密夫は狭衣であることが解つた。巻二之下に至つて母大宮の懊悩は遂に病となつて薨去となる。思ひ煩ふ女二宮は、この不幸を機会に出家して尼となつてしまふが、狭衣はそれ以前に今一度女二宮に逢ひたいと思ひ、或る月夜秘かに女二宮の方に忍び込むのである。その後間もなく嵯峨帝は譲位し出家の身となつて洛西嵯峨野に閑居してしまふが、女二宮も亦そこに同居することになる。巻三之上では、狭衣は嵯峨院から前斎院（女一宮）と若宮（狭衣と女二宮との間の子）とを預かるやうにとの指示があつてお世話されることになる。だがそれが却つて狭衣には女二宮を思慕する原因となつてゆく。丁度巻三之下では、狭衣は嵯峨院の法華八講の果ての十三日の夜、女二宮の部屋に忍び込んで日頃の自分の意

中を語ることになるが、当の女二宮はただ消え入るばかりに当惑しきつておいでになられるのであつた。かくて巻四之上になると狭衣は、或る一日若宮もろとも嵯峨院に参られる。その序に狭衣は念誦堂に籠る女二宮に立ち寄る。そこには中納言の内侍も居られる。狭衣は御前の御簾の内へ入られると入道宮は慌てて奥へ引込まれる。その機を逃がさず狭衣は其処にあつた御几帳を押し退けて御覧になると薄鈍色の扇子があつたが、それに

手になれし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる

と片仮名で御書きになつて置かれた。また巻四之下の末尾では、狭衣は嵯峨院が病気の事を聞いて、その御見舞に赴くのであつたが、その序に狭衣は女宮に対面されるといふ構成となる。狭衣は御簾の内に半ば御入りになつて、御衣のつまを引き寄せながら歎かれるのであるが、女二宮には何んとも返答はなかつた。狭衣も亦この様に自分は物思ひにのみ終始することも、「如何なりける前の世の契にか」と憂愁の情を抱きながら、力なく初秋の嵯峨野を都へと帰るといふ中に物語は終るのである。

以上物語に見える空蟬の物語構想は、右に言ふ狭衣物語の源氏宮や女二宮の物語場面に直接どのやうに影響を及ぼしてゐるものかについて、以下その典拠関係を具体的に論証することにする。

二

狭衣物語巻一之下の冒頭の一節に狭衣が源氏宮を訪ねるといふ個所があつて、今その一文を掲載すれば次の通りになる。

A畫つかた（狭衣）参り給へれば、大宮もこなたにおはしまして、もろともに碁うたせ給ふなりけり。「とく参りて、見証仕うまつるべかりけり」とて、近やかにゐ給へるに、Bちひさき御几帳なども押し遣られて、常よりもはれ〴〵しければ、宮はいとはしたなしと思せど、母宮の見給へば、例のやうにもえ背き給はず云々

（巻一之下）

つまり、この部分は狭衣中将が昼頃、意中の源氏宮の所へお出でになられた。すると母宮と源氏宮とは、御几帳などを押し退けて碁を打つて居られるといふ一脚色なのである。

ところで一方源氏物語空蟬巻冒頭近くに、空蟬と伊豫介の先妻の娘軒端荻とが碁を打つて居たれる処を源氏が密かに簾越しに眺めるといふ一場面があり、この個所は上の狭衣の筆法と誠に相似通つてゐるが、今その一詞を登載すれば次の通りになる。

「何ぞ、かう暑きに、この格子は下されたる」と問へば、御達

Aこの入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるによりて、西居たらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて、簾の間に入り給ひぬ。

「畫より西の御方の渡らせ給ひて、碁打たせ給ふ。さて、むかひざまに見通し給へば、この隙に立てたる屏風、端の方おしたゝまれたるに、Bまだ鎖さねば、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うち懸けて、いとよく見入れらる。（空蟬巻）

構想上右の如く相酷似する技法中、特に両場面とも屏風を押し退けられて碁を打つて居られる辺りは、著作上とても遇合とは思はれぬ一致点であろう。

またこの場合、狭衣中将が源氏宮を訪ねる動機を吟味すれば、それは巻一之下の発端に、

源氏の宮は、古き跡尋ね給へりしのち、さやかにも見合せ給はず、ことの外なる御気色を、さればよとつらく心憂きに、「今はた同じ難波なると、ひたぶる心も出で来て、然るべき隙を見給へど云々（巻一之下）

と見えてゐるのである。実はこの例文の圏点の「源氏の宮は、古き跡尋ね給へりしのち云々」とは、巻一之上に、「この絵どもを見給へば、在五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけり。と見るに、あいなうひとつ心なるこゝちして、目とゞまる所に多かるに、え忍び給はで、『こはいかが御覧ずる』とてさし寄せ給ふまゝに云々」とある個所を指すことになる。つまり狭衣は伊勢物語の古事に托して源氏宮に云ひよつてより後は、何時も狭衣から遁れようとの態度を繰返へされる。この源氏宮の胸中を察した狭衣中将は、上例文にも「さればよとつらく心憂きに云々」と見える如く、彼は無理やりにも逢はねばと決心し、その機会をねらつてゐたといふのである。

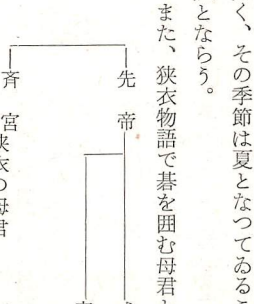
さて、右の狭衣の事情に対して源氏物語でも光源氏が空蟬に忍び入る魂胆については、帚木巻の末尾に、「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめい給ふかな、すざましき様には、よに見え奉らじ。」とあるが。このやうな気持ちで、光源氏は空蟬に忍び込むのである。しかるに空蟬は「今はいふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくて止みなむ」とて、冷淡な態度を押し通される。源氏は失望されながら中川の邸を引き上げるといふやうに、物語は構成されてゐる。ところが空蟬巻冒頭文の一節にも、

君は、心づきなしとは思しながら、かくはえ止むまじう御心にかかり、人わろく思ほしわびて、小君に、「いとつらうも、うれたうも覚ゆるに、強ひて思ひかへせど、心にしも従はず苦しきを、さりぬべき折見て、対面すべくたばかれ」との給ひわたれば云々。（空蟬巻）

とあつて、源氏は空蟬をこのまゝでは思い切れぬと云つて小君に今一度逢はせて欲しいと、手引きを頼むことになる。

以上の如く狭衣が源氏宮から遠ざけられても、なほ思ひ切れずに源氏宮を訪ねる辺りと、源氏君は空蟬から敬遠されながらも空蟬の住む中川の家に忍び込む結果とは並々ならぬ関係を髣髴させるものである。しかも、その上載の狭衣の背景は「お前の木立木暗くあつかはしげなる中に、蟬のあやにくに鳴き出でたるを云々」とあつて、その時候は夏であれば、源氏物語の場合も亦「なぞかう暑きに、この格子は下されたる……うつ蟬の葉におく露の木隠れて云々」との如く、その季節は夏となつてゐることの契合も、その退引ならぬ確証とならう。

また、狭衣物語で碁を囲む母君と源氏宮との血縁関係は、



との通り、狭衣の母君すなはち斉宮は源氏宮の叔母君に当る。これに対し源氏物語において碁を囲む空蟬と軒端荻との関係を表示すれば、

空蟬
伊豫介
先妻
軒端荻

となり、空蟬は軒端荻の義母に当るのである。このやうに両人物の素姓の細部に至るまで、両作品は同巧の筆となつてゐることも、著作上見逃がしてはならぬ重要な一考証と考へる。

しかも狭衣物語の巻一之下と源氏物語の空蟬の碁を打つ構想の近似については、上に述べた通りであるが、更に語句上の類似個所をあげてみれば次の通りになる。

A 晝つかた参り給へれば大宮もこなたにおはしまして、もろともに碁うたせ給うなりけり。（狭衣物語巻一之下）

A′ 晝より西の御方の渡らせ給ひて、碁打たせ給ふといふ。（源氏物語　空蟬巻）

B ちひさき御几帳なども押し遣られて（狭衣物語　巻一之下）

B′ 立てたる屏風、端の方おしたゝまれたるに（源氏物語　空蟬巻）

これらの文辞上の契合はそのただならぬ確証である。

なほ、ここで一言したいことは、狭衣巻一に見える源氏宮の典拠については、前項に叙述する通り、それは国語教育第六号所載拙稿「源氏桐壺巻と狭衣巻一との交渉」中に説明する如く源氏物語の藤壺に依拠するものである。しからば狭衣全巻に見える源氏宮の著述材料は、悉く源氏物語における藤壺のそれのみに模したものかと言へば、決してさうではない。例へば狭衣巻一上での「この絵ども見給へば、在五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけり云々。」のところで、狭衣中将は在五中将日記に托して源氏宮に意中を語る場面は源氏総角巻の「在五が物語をかきて云々」とある個所、すなはち匂宮は在五物語絵巻に寄せて女一宮に心中を告げるといふ趣向に拠つて描出されたものである。このやうな事情から類推して、上述の源氏物語における空蟬の記事が源氏宮と、また後段に解明する女二宮との両者に取材されてゐることも、何等不自然なところなく、むしろ此のやうな手法は狭衣の作者の常套手段といつてもよからう。

三

狭衣物語巻二之上の前半に、本物語主人公である狭衣は、中納言の内侍を訪ひて不慮に女二宮の寝所に忍び込む個所があるが、今その一文を次に掲載することにする。

南の戸口のかたに寄りて聞き給へば、妻戸細めにあきて、火の光ほのかに見ゆ。寄りてやをら開くれど、とがむる人なし。火桶に火などおこしおきて、夜居の僧のあからさまに出でたる跡と見ゆ。A やをら入りて、火をあふぎ消ちて、B 障子口まで寄り給へど云々帳の前に二所臥し給へり。ほのかなる火の影に、いづれがいづれともとみにわかれ給はず云々かたはら臥し給へる御髪のかゝり、なべてならず見え給ふなり。二の宮におはすらむと、目とまりたまふ。（狭衣巻二上）

つまり此の内容では、狭衣は母大宮の不在を好機に、奥の琴の音を便りに障子口から通つて忍ぶと、几帳の前に二人の姫君が寝て居ら

れる。どちらが姉君であり、どちらが妹君か解らぬが、横になつて居て、髪の様子も優れて美しいのが二の宮であらうかと云ふ一節なのである。

一方源氏物語帚木巻に、物語主人公である光源氏は、方違ひのため紀伊守を訪ひ、そこではからずも空蟬の寝所に入り込むといふ事件が描かれてある。今その一文を挙示すれば次の通りになる。

この北の障子のあなたに人のけはひするを、こなたや、かくいふ人の隠れたる方ならむ。あはれやと御心とゞめて、A′やをら起きて立ち聞き給へば、ありつる子の声にて云々「まろは端に寝侍らむ、B′あなくるし」とて火かかげなどすべし。女君は、たゞこの障子口すぢかひたる程にぞ臥したるべき云々。几帳を障子口には立てて、火はほの暗きに見給へば云々。みだりがはしき中を、分け入り給へれば、ただ一人いとささやかにて臥したり。

行文上、右の「この北の云々」の例文の概要を解説すれば、すなはち、光源氏は中宿りの独寝に目も冴えて眠られぬまゝに、北の障子の向ふに人の気配がするのに心がときめくのである。屹度あそこに例の空蟬が隠れてゐるに違ひなからうと、そつと起き立つた。奥からは声付きの似通ふ話声が聞えるが、源氏はこれこそ姉弟（空蟬と小君）だと思はれた。その中に弟の小君は「私はこの端の所に寝ませう。暗いなあ」と云ひながら休まれる様子であるし、また女君も直く傍の障子口のところに休まれたやうである。そこで源氏は声音のした方向へと入り込むと、そこには唯一人小柄な女が打ち臥してゐるが、源氏はそれが空蟬と気がつくといふやうに、この場面は作られて居り、これが丁度上述の狭衣の描出と全く同巧の手法となつてゐる。殊に右の場合小君が「まろは端に寝侍らむ云々」と云へば、姉の空蟬も「障子口すぢかひたる程にぞ臥したる」と云ひ合つて休まれる、これらの姉弟たちの動作の描出と狭衣物語で「帳の前に二所臥し給へり」とある女二宮たちの姉妹関係のそれらとは、これ亦全く同調の筆法と云つてよからう。更にこれら両場面の当該文面を比較対照する時、A「やをら入りて（狭衣巻二之上）」とA′「やをら起きて（源氏帚木巻）」、B「障子口まで寄り給へど（狭衣巻二上）」とB′「障子にすぢかひたる程に（源氏帚木巻）」、C「帳の前に二所臥し給へり（狭衣巻二之上）」とC′「几帳……たゞ一人いとささやかにて臥したりつ（源氏巻二之上）」など数多くの類似点が指摘されるのである。このやうな符合点こそは、その明白な確証となる。

四

狭衣物語巻二之下の冒頭近くに次の事件が描かれてゐる。今その筋書きを説明すれば、狭衣は女二宮が母宮の薨去を機会に出家されるといふことを耳にされたので、あの夜目にも美しく思はれた姫君の御容貌をば、変らぬ元の姿のうちに、もう一度逢ひたいものと思つて嵯峨野に急ぐ。二の宮の所にお出でになると、門なども特に戸締りする人はなく、開け放たれたまゝであつた。狭衣は風音の紛れにそつと中をお明けになると仄の暗い燈火の光に、ものも見分ける事も出来ないが、秘かに二の宮の御部屋らしく思はれる所へ近づかれる。一方日々夜中の物思ひに眠らぬ二の宮は、さつと匂つて来る燻きしめた香の中に、狭衣の姿がちらつと見えたのに驚かせられて、萎えた御単衣をお召しになつて、御帳のうしろへそつと抜け出られ

たのである。大将もそれが二の宮らしいと気付くや、我を忘れて二の宮の衣を摑んで引き留めようとなさる積りであつたが、たくさん着てゐられる上の衣だけは、狭衣の手に残つたのである。あたりを見られると褥も衣もそのまゝ押しつくねてあつて、むなしく女の匂ひばかりが漂つてゐる。相手の女二宮は遠くへ逃げることも出来ないで、ころがるやうにして出られたものの、御帳の帷にひつかかつて、どうにもならなかつたので、宮は狭衣にさぐり当てられはすまいかと思ふと恐しくてわな〳〵と震へながら悲しい涙に濡れてしまふといふ物語の内容になつてゐる。

ところで源氏物語空蟬巻に見える空蟬と軒端荻とが碁を打つてゐる所を源氏が簾垂れ起しに眺める点については既に第二項で詳述した通りであるが、この場面に続く直ぐ後に次の場面がある。すなわち年若の軒端荻は、「私も今晩はここで」と云つて、そのまゝ熟睡してしまふ。空蟬はふとあたりに漂ふ香の薫りに眼を覚し頭をあげると、単衣を打ち掛けてある几帳の透間から誰かゞ忍び寄るのか、暗くはあるが能く見える。意外とも何とも、とかう分別する暇もなく、女はそつと身を起して、生絹の単衣一つ着ただけで抜けてしまつたといふ手法である。実はこの趣向と右にいふ狭衣巻二之下の着想とを比較吟味する時に、縷説するまでもなく、一見して技法の典拠関係が明白であり、更に次に挙示する二作品の文辞の似通ふ点などは一層その確証を裏付けることになる。

姫君は、いつもとけて寝させ給ふことなかりければ、あやしと思して少し見やり給へるに、あさましく思ひかけざりし夜な夜なにかはらねば、その折よりも今少し心騒がせられて、萎えたる御単衣を奉りて、御帳の後にすべりおり給ふも、わだ〴〵と戦かれて頓にも動かれ給はざりけり。（狭衣巻二之下）

とあれば、源氏物語にも

（空蟬）昼はながめ、夜は寝覚がちなれば、春ならぬこのめも、いとなく歎しきに、碁打ちつる君、今宵はこなたにと、いまめかしくうち語ひて寝にけり。若き人は何心なく、いとようまどろみみるべし。かかるけはひの、いとかうばしくうちにほふに、顔をもたげたるに、単衣うちかけたる几帳の透間に、暗けれどうち身じろぎ寄るけはひ、いとしるし。あさましく覚えて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣を一つ著て、すべり出でにけり。（源氏物語　空蟬巻）

と見える。このやうに相酷似する両例文中、特に女二宮も空蟬も共に御単衣を身にして御帳の後にすべり出るといふ趣向上の一致は、まさにたゞならぬ影響関係を立証することになる。

五

狭衣巻三之下に、嵯峨院の法華八講が行はれる個所があつて、狭衣はこの八講の果ての夜に女二宮に忍び入つて日頃の心緒を語ることになるが、次にこの辺の事情を今少し詳細に説明することにする。つまりその晩女二宮のお部屋で若宮（狭衣と女二宮との間に出来た子）は内侍に「今宵は宮の御まへに御殿ごもれ、つとめて迎へに来むといひつるや」と云はれて喜び廻つて、外れ易く出来てゐる掛け金は、そのまゝ放して置かれたのを誰も知らう筈はない。そこへ隙を睨つてゐた狭衣は、そつと入つて来られる。戸が静かに開いたか

と思ふその瞬間追風がさつと薫しい香を送つた。女二宮は、思はずそちらを向くと狭衣の冠の影が見えたので、無我夢中で、仏間の方へ逃げて障子を立てきらうとせられるが、手がふるへて急にお立てになることも出来なかつた。狭衣はかつて女二宮の出家直前の夜忍んで来た時、宮のもぬけのからなる御衣の裾までも残りなく入れてしまはれた宮のすばやしこさが格別であつたものの、今宵の入道の宮にとつては、部屋の向ふは塗籠であるから、これ以上逃げられなかつた。宮は涙を袖でおさへたまゝ身動きもなさらなかつた。これを見た狭衣は安心して、あの初会の頃から今日までの思ひ歎きの数々を訴へられる。しかし今となつた宮は身じろぎ一つなさらぬので、狭衣は、

藻刈舟なほにごり江に漕ぎかへりうらみまほしき星のあまかな

と歎かれる。たゞ二の宮は、

のこりなくうきめかづきし星のあまを今くり返しなに恨むらむ

とばかり思ひ続けられて、当惑しきつておいでになるので狭衣も、

後の世の逢ふせを待たむわたり川わかるゝほどに限なりとも

といつたまゝ、捉へた袖を容易に放さうともなさらない。さらでも淋しい狭衣の心は、俄にこの場を立ち去らうともなさらぬ中に、風は山の端に隠れ、朝霧の立つ頃ともなつてしまつたので止むなく院をお出ましになられるといふ場面となつてゐるのである。

実はこの技法と酷似する個所は、かの源氏物語帚木巻で、光源氏は小君の案内で空蟬の部屋に忍んで語り合ふ場面がそれである。つまり光源氏は紀伊の守の邸に泊つてゐるが、その隣の部屋で小君は、「まろは端に寝侍らむ。あなくるし。」と云つて灯を挑げると、直ぐその傍に寝てゐた空蟬は「中将の君は何処にぞ。人気遠き心地して、もの恐し」と言ひ合つてゐる中に夜は深まつて行くのである。この機を窺つてゐた光源氏は、空蟬の部屋の掛金を試しに引明けて御覧になると、幸ひ向ふ側からは懸けてなかつた。源氏は中のほの暗い火影を頼りに先程から声音のした辺りに入り込まれると、そこには唯一人の女性が打ち臥してゐる。源氏は今こそ絶好の機会と思ひ、女の着てゐる衣を押し退ける。空蟬はどうして良いのやら、まるで夢にうなされたやうな心地で怖えるのであつた。源氏は人目を気遣つてやきもきする女の手をば、一度は放たれたものの再び引き留め、

つれなさをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまでおどろかすらむ

と云ふ。空蟬は今夜の秘密を夫伊豫介が何か夢にでも見るのであらうかと気がひけて、

身のうさを嘆くにあかで明くる夜はとりかさねてぞ音もなかれける

と嘆かたる。月は有明の月、夜も白々しくなつて来た。源氏はこの静かな自然の中を、人知れぬ恋に胸を痛めながら、その場に別れを告げるといふ構想がそれである。

以上の解明通り、狭衣巻三之下で狭衣が女二宮に忍ぶ趣向は、この源氏帚木巻で源氏が空蟬に忍び込む結構とは全く軌を一つにするものである。殊に右の場合狭衣が「後の世の云々」と女二宮に云つて、捉へた袖を握つて離さぬ手法と、源氏が「つれなさを云々」と空蟬に云つて、相手の手を握つて離さぬ筆法などに、著作上何らか

の関係のあることは明白である。しかもその上両者の当該本文を照合する時、次の如く文辞上にも亦頗る酷似する個所が種々挙げられることを併せ考へれば、このやうな推測も甚しい独断ではなからう。

A 仏の障子口に入りて引き立てさせ給ひぬるも、手のみわななかれて頓にぞ立てられぬ（狭衣　巻三之下）

A′ 女君は、たゞこの障子口すぢかひたる程にぞ臥したるべき。（源氏　帚木巻）

B こゝかしこ紛れありき給ひて、心やすきかけがねにや、はなちおき給ひてけるを、誰かは知らむ。（狭衣　巻三之下）

B′ 皆しづまりたるけはひなれば、かけがねをこゝろみに引きあけ給へれば、あなたよりは鎖さざりけり。（源氏帚木巻）

C 冠の影ふと見ゆるに、物も覚えさせ給はず、仏の障子口に入りて引き立てさせ給ひぬるも、手のみわななかれて、頓にぞ立てられぬ。（狭衣　巻三下）

C′ ともかくも思ひ分かれず。物におそはるゝ心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず。（源氏　帚木巻）

D 戸のやをら開くおとして、さと匂ひ入りたる追風も、まぎるべうもあらぬに、唯何とも思ひあへずや見やり給へれば云々（狭衣　巻三之下）

D′ いとちひさやかなれば、かき抱きて障子のもと出で給ふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。「やや」と宣ふに、あやしくて、探り寄りたるにぞ、いみじくにほひ満ちて、顔にも薫りかかる心地するに、思ひよりぬ。（源氏　帚木巻）

E いかにも〳〵のたまはせよと、御手引きよせ給へるに云々。（狭衣　巻三之下）

E′ ゆるし給ひても、また引きとゞめ給ひつつ、いかでか聞ゆべき、世に知らぬ御心のつらさも云々。（源氏　帚木巻）

六

狭衣巻二之下に「はかなく月日も過ぎて、（母宮）の御四十九日なども果てぬれば云々」とあるが、これは女二宮は母宮の四十九日の機縁に出家を決意される場面である。「さばかり思ひつゝ消え給ひにし御身の苦しさなどを、知らず顔にてはいかゞ過ぐさむ云々」と見える如く、女二宮は亡き母宮の魂に祈らんために「日頃はよろしくもやと待ちつるに、今日などは留るべき心地もせぬを、仏の御しるしもやと試みまほしくなむ云々」との決意で、とう〳〵尼の姿に入られてしまふのである。一方源氏物語関屋巻の末尾にも、空蟬の末路について「かゝる程に、この常陸の守、老の積りにや悩ましうのみして女君、心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれ惑ふべきにはあらん云々、」と見える。この所は、常陸守は老衰して亡くなるが、その妻である空蟬は、若い河内守からの懸想などの恐しさもあるので、遂に薄命の己が身を深く観

じて「はてはてはめづらしき事どもを聞き添ふるかな、と人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで尼になりにけり」との如き心境で出家されてしまふといふのである。このやうな女性の最後は平安朝の作品中に良く見られる脚色である。従つて、狭衣の女二宮と源氏の空蟬との尼になる共通点だけで、直ちに両者の依拠関係をそこに推断することは出来難いが、叙上の女二宮と空蟬との全体的な構想の諸近似に右の事柄を併せ考へる時、これまた著作上の交渉を認めても無理なことはなからう。

（昭和三十五年十一月十五日　稿）
（昭和三十八年　五月　三日　補）